

【台本】愛が重すぎるダウンナー研究者お姉さんからは逃げられない。

～台本の内容～

- ・あらすじ
- ・作品の説明
- ・本編
- ・ハッピーエンド
- ・バッドエンド

(あらすじ)

とある研究所で助手として働くあなた。
その研究所にはあなたと研究者の女性、青空杏花と二人きり。
二人で時間を過ごしていくうちに二人は恋仲に。
幸せな時間を過ごしていたが、長い時間を共に過ごしていると訪れるのは老い。
年をとり、寝たきりになってしまった寿命の近いあなたを、昔と全く変わらない姿の青空杏花が面倒を見てくれる。
そしてあなたに若返りの手術をして、自分と共にずっと生きて欲しいとお願いしてくる…。

(説明)

この作品では本編をきいた後にエンディングを選んでもらう。
エンディングは2種類で、バッドエンド、ハッピーエンドとなっている。

これから喋る内容はエンディングのネタバレがあるから気をつけてくれ。

バッドエンドでは私の重い愛に耐え切れず、キミが私の前からいなくなってしまう、それを知った私が悲しみでおかしくなるといった内容だ
シリアスで重い。私を悲しませたい、泣かせたい、発狂させたいというやつ向けだが…

まさか、選ばないよな？
信じているぞ、助手くん。

ハッピーエンドでは普通にきみと仲良くしているだけだ。
まあ、こっちを選んでおけばいい。
待っているぞ。
ふふふ。

説明は以上だ。

~~~~~

(☆本編\_前半\_01\_目覚め)

やあ、助手くん  
起きたみたいだな

おはよう

いい朝だな  
空が青くてとても綺麗だよ  
とは言っても、君には、あまりよく見えないだろうが

目の手術すればよく見えるようになるぞ

と、言ってもやらないだろうな

ふふふ...まあいいが

よいしょ  
君が目覚まさないで、どうしようかと思ったよ  
まあ、杞憂で済んでよかったがね

よく寝ていたみたいだが、いい夢はみれたか？

覚えていない？ そうか、よく眠れた証拠だな  
それはよかった

私は若い頃の君に会う夢を見たよ  
君が立って掃除をしていて、腹が減ったと言ったら料理を作ってくれたんだ  
ああ、懐かしいな

君がキッチンに立たなくなってしまったから、私もずいぶん料理が上手くなってしまったよ

君が作ってくれた料理の味、数十年前のことだが、昨日のことのよう思い出せる  
記憶力はいい方だからな  
また、いつか、食べたいな

(☆02\_健康診断)

さて...そんな話もほどほどにして

今日も朝食の前に健康診断といこうか  
ポックリと死なれては困るからな

それじゃあ...  
今日が何月何日かわかるか？

...

うん、そうだな  
あっている

次の質問だ  
私の名前、わかるか？

...

ああよかった

大丈夫そうだ

そう、青空京花だ  
キミの恋人のソラだよ

ふふふ

私の名前、覚えていてくれるみたいだな  
安心した

ん？忘れるわけないって？  
どうだか...  
昨日食べた飯も覚えてられないやつの言葉は信用できない

まあとりあえず...意識はしっかりしているみたいだが...

身体の方は...  
あまり数値が良くないな  
日に日に悪化している

どうしたものか...

大抵の病気は治せるが、老いだけは私でもどうしようもできないからな...

どうしたものか

(☆03\_誘い)

はあ...

こんな身体中管だらけになってしまって...  
見ていてとても痛々しいよ

きみもはやく身体を変えればいいのに

もう用意はできているんだぞ

そうしたらこんな面倒な健康診断、毎朝、毎晩としないでいいんだ

今の君は目もほとんど見えない上に、歩けもしなければ記憶も曖昧  
今聞こえているであろう私の声も昔ほど鮮明に聞こえないだろう(近づく)  
もしかしたら急に聞こえなくなるかもしれない...

そんなんじゃ、君も辛いだろう？

私と出会ってからずっとその身体じゃないか  
確か、今、90歳とかだろう、きみ  
いや、もっといったか？

どーりで身体の至る所がボロいわけだ

昔の姿からは想像できないな  
その体に愛着があるのはわかるが、そろそろ考えてくれないか？

...何のことだと？

はあ、ボケてしまったのか？  
まあその年齢でボケていない方が珍しいが

考えて欲しいというのは脳の移植手術だよ  
君のクローンの体に脳を移植する  
そうしたら体だけ新しくなり、記憶はそのまま

実質、若返りだ

なあに、心配するな  
手術は何度も成功している

実際、私は何度も身体を変えて君の目の前にいるだろう  
君が出会った頃と変わらない、青空京花の姿で

見ての通り一度も失敗していない  
失敗していたらここにいないからな

...いや、失敗はしたことあるな  
大昔に一度だけ...  
まああれは..うん  
初めてだったからな  
仕方ないな  
事故のようなものだったし

...安心しろ『今』の私はすごく腕がいいんだ  
それは君もわかっているだろう？  
なんせ、何十年も私のそばにいるのだから

それに君の手術、となったらいつもより慎重に確実にやる  
失敗の心配はするな  
何度もシュミレーションしている  
成功率は99%だ

いきなり地球に隕石でも降ってこなければ成功する  
手術が上手くいけば晴れて君は若返る

そうしたら一緒に街に降りて、買い物でもしようじゃないか  
ここ数年はキミにつきっきりでろくに研究所から出れていないからな

若返ったら、そうだな  
昔みたいに、助手くんには荷物持ちでもしてもらおうかな  
ふふふ

...じゃあ若返んなくていい？  
おいおい、ジョークだろう  
全く、私をなんだと思っているんだ

まあ、確かに昔街に降りて買い物をした時抱えきれないくらいの荷物を持たせたことがあった  
が...

12回くらいだろう  
...結構多いな

こほん

なあ、身体だけ若返るんだから、はやくやらないか？  
記憶はそのまま引き継がれるんだぞ？  
こんないい話どこにもないぞ

君が死んでしまっってはこの提案は遅いからな

なあ？どうだ？

...  
同意をするときは首を縦に振るんだ  
横に振るんじゃない  
そんなことも忘れてしまったのか？

(☆04\_頼み)  
全く  
どうして「うん」と頷かないんだ  
それで済む話なのに

抵抗があるのはわかるが、少し眠っている間に済む  
最初は怖いだろうが、慣れてしまえばなんてことはない

はあ、そんなに首を横にふるな  
信頼されていないようでこっちが傷つく

君の同意を得ずに手術をするのはかわいそうだから  
今までやってこなかったが...  
容態を見た感じ、そんなこといよいよ言ってられなくなってきたな

なあ、頼むよ  
手術させてくれ

私を一人ぼっちにするつもりか？

助手くんが若い頃は、私のことを置いていかない、だとか一人にはしない、なんてロマンチックな  
ことを言っていたくせに

はあ、私の胸を熱くしてくれた男はどこへ行ってしまったんだ？

もう私のことは、好きじゃないのかー？  
好きなんだろうー？なあー？

...  
そこは、顔くのか

よく、わからないやつだ

なら、なおさら手術しろ

死んでしまったら、こうして私と話すことも、私を見ることも、私の熱を感じることも、永遠になくなる

本当に君はそれでいいのか？

...寿命で死ぬのは人間のあるべき姿だから、逆らいたくない？

確かに死は生命の進化において重要だ  
生物とし生き、子を作り、死ぬ  
そうすることで私たちは進化してきた

だが  
それがどうした？  
世界中の人間に生き続けようと言っているわけじゃない  
わたしと君だけで生きようと言っているんだ

人間の世界から離れて、この研究所で、永遠に

...ああ、馬鹿な人間が軽率に使う永遠じゃないぞ

本当の永遠だ

無限の時間を共にすごそう  
君には永遠に生き続ける権利があるんだ  
私のそばで...

(☆05\_永遠)

...何？  
寿命をまっとうし、死ぬことが美しい？

それは生き続けることができないやつが死を受け入れるために言っているだけだ

私は死にたくない  
君とも離れたくない  
絶対にだ

輪廻転生なんて言葉があるが私は一切信じていない  
これも死を受け入れるしかないかわいそうな人間が自分に言い聞かせる言葉だろう

仮に生まれ変わったところで君にまた巡り会える確証がどこにある？  
私は、青空京花として、君と、共に時間を過ごしていきたいんだ

それはどちらかが死んでしまったら2度とできない  
私を取り残されたら、一体どうしたらいいんだ

は？  
...生まれ変わってもまた会える、だと？

はあ  
何を言っているんだ？  
無理に決まっているだろう  
御伽話じゃないんだ

生まれる場所、環境、人種、性別、思想、これらは生まれてくる時に選べない  
ほぼ運で全てが決まる

まず人間として生まれ変わるかも不明だ  
次生まれ変わったら犬や猫、虫、私が実験で使うマウスやモルモットかもしれない

そもそも生まれ変わり、というのがあるのかすらもわからない

そんな不確かなものに身を任せるのはいやだ  
それなら生命のあるべき姿とやらの逆らっても私は生き続けたい

神がいたら、私を見て確実に嫌な顔をするだろう  
そういったことをしている自覚はある

...こんなことをしてまで生にしがみついている私の姿は、君にはひどく醜く映っているだろうな

こんなことをしていたら地獄に落ちると思うか？

ふふふ

天使だか悪魔だか知らないが、できるものなら落としてみろ

地獄は死者がいくものだろう？

私は死なないのだから、いく予定がない

未来永劫な

まあ、怪獣が現れてこの研究所を踏みつけにでもしたら死ぬがな

はははは

今の私の生命信号が途切れたら地下に保管してあるスピアが動くようになっているから怪獣でも私を完全には殺せないだろう データも毎日更新しているから、問題ない

ああ、もしもの時に備えて君のスピアも作るか...

同じ部屋に保管するスペースはあったはずだ

機材も余っているし、できるだろう

...ん、勝手に話を進めるな？

ああ悪いな

すましているように君には見えるかもしれないが

実は、内心すごく焦っている

毎日、毎日、君が死んだらどうしようと思っている

君が目を覚まさなかったら、心臓が動かなくなったら、身体が冷たくなっていたら...

そう思うと、胸がざわついて居ても立ってもいられない

本当は今すぐにでも手術を強行したい

でも、そんなことをして、嫌われたくないじゃないか...

...おい、笑うところじゃないだろう

案外考えが乙女で面白かった？

はあ、悪かったな

大昔はこんな思考じゃなかったんだが...

どこかの誰かのせいでこんな感じになってしまっとな



どうにかしてほしいよ

私をこんなにしておいて、責任を取らずに死のうとしている奴がいるらしい  
全く、どこのバカだろうな

そんなバカが死後行くのは地獄だろう  
それも、一番下の地獄だ

...まあ、そんな奴がいる地獄ならいいがな  
なんてな

何？  
...自分以外にもいい人がいる？  
街に降りれば一人じゃない？  
出会いがある、だと？

うるさい  
そんなことが聞きたいんじゃないなんでそんなことを言う？

そんなものを見つける必要はない  
助手くんの代わりは、どこにもいないんだ

だからこんなに必死に、何回も、時間をかけて私は君を...説得しようとして...

これじゃあ、私の方がバカみたいじゃないか

昔は私の言うところをよく聞く助手だったのに  
なんでこれだけは聞いてくれないんだ

はあ  
年をとってずいぶんと生意気になったな、助手くん

まあ今では寝たきりだから助手ではないがな  
どちらかというと私が君の助手みたいになっている

一人で飯も食えない、風呂も入れない、トイレもいけない

全く、老いとは残酷だな  
やはり私には美しいとは思えない

ああ、悪い  
勘違いしないで欲しいが君のことは好きだ  
君が思っている以上にね

老いてしまっても不思議と君が美しく見えるよ

思い出が美化しているのかもしれないが  
不思議だな

できないことばかり増えて、君は私の足手纏いなはずだが、そんなところでさえ愛おしいよ

離したくないな

ずっと、君を

と、話している間に健康診断はおわりだ

薬の量を調整する必要があるそうだ  
とりあえず、朝ごはんにでもしよう

一緒に食べよう

まあ、君は流動食だがね

私がベーコンエッグトーストを食べるところを指を咥えてみているんだな

食べたくなったらいうといい  
手術してやるからな

ふふふ

~~~~~

(☆本編後半_01_目覚め)

やあ、おはよう

助手くん
気分はどうだ

昨日の夜、いきなり意識を失ってしまったからな
心配したんだぞ

つきっきりで面倒を見ていたからな
ふああ、一睡もしていないよ

でもその感じだと、調子は良さそうだな
よかった

ああ、いい朝だな、朝日がいつもより眩しいんじゃないか？

なあ、ぼーっと寝ていないでベッドから起きたらどうだ、自分の足で

私の助けなしでも起きあがれるだろう

いや、まだ動くには早いか？

まあいい、立ってみろ

うん、みた感じは問題なさそうだな

どうだ、身体が軽いだろう？

自力で歩くのは久しぶりだろうから、気をつけてくれ

驚いているな

まあ無理もないか

さあ、私のそばにきて

顔をよく見せてくれ

うん、うん

問題なさそうだ

どうやら成功したみたいだね

ふふ

こんなにしっかりと君と目を合わせるのは久しぶりだな

そんなに見られるとなんだか少しだけ、恥ずかしい

でも、悪くないな

私の顔、よく見えるか？

もっと近くで見てくれ

声も、よく聞こえるだろう...？

ふふふ...

そう、やったんだ

若返りの、手術

(☆02_懇請)

君の許可を取らずにやるのは気が引けたが...

昨日の夜、急に君の容態が悪化してね

本当に危ない状況だったんだ
冷や汗がとまらなかった

君は覚えていないだろう
私が駆けつけた時にはすでに意識がなかったからな

気づくのが遅れたら君はここではない地獄にいたろうな

もう、長くなさそうだったから
私の判断で手術させてもらった

許可を取ろうにも、君の意識がなかったしな

これで数十年は問題なさそうだな よかった

...そんな顔をしないでくれ

...やっぱり、私のこと、嫌いになったか？
まあ、聞かなくてもわかる
なるだろう

...嫌ってくれていい
それくらいのことをやったと、思っている

死ぬ間際まで抵抗していたんだ

その身体で生きるのは相当嫌だろう

でも、もう一回だけ、その身体で、私のそばにいてくれないか...

次、君が寿命を迎える時までには、私も...覚悟を決めるから

頼む...

自分でも、歪んでいるのはわかる
こんなの、人に押し付けるようなものじゃない

相手を好きなら、愛しているんなら、なおさらだ

こんな状況になってわかったよ

私は結局...自分が一番可愛くて、好きなんだ

だから、君の意思を無視してこんなことをしてしまった

最悪の人間だ

いや、もう私は人間の形をしているだけの、醜い生物だろう
きっと、人間が落ちる地獄にすらいけない

こんな形で、君を愛してしまって...すまない

次は、君を一番に愛してみせる

そうすればきっと、君の死を受け入れられる気がするんだ
今は、難しいが

私の長いわがままに付き合ってくれ...

君は、私の助手だろう...？

私が頼んだことはやってくれ

ここにきた時に
そう、契約したんだから

なあ、いいだろう
お願いだよ

助手くん...

~~~~~

(☆エンディング1\_バッドエンド)

助手くん、そろそろ昼の時間だぞ

一緒に、食べないか？

キミが好きな料理を作ってみたんだ  
うまく、できているか自信がなくてね

自分で食べてみたんだが、味見しすぎてよくわからなくなってしまった  
料理は難しいな

よければ味見だけでもどうだ 一口だけでも

...助手くん、やっぱり怒っているんだよな

勝手に、こんなことして悪かった  
命に関わる判断を他人である私が決めていいはずがない

何度私が謝っても、何をしようとキミの心の傷はきつといえないだろう

私の顔を見たくない気持ちはよくわかる

だけど、少しは食べないと体に悪いぞ

私のことは許さないでいい  
口も...聞かなくていい

でも水くらい飲まないか？  
何も食べないというのなら点滴とか...

その、だから、扉閉じてないで、開けてくれ

私がいやなら、ロボとかに配膳させようか？

おい...  
なんでもいいから返事してくれないか...？  
頼むよ...助手くん

うーん、このまま食事をとってくれないとまずいな  
若返ったとはいえ、餓死してしまう

無理に入るのはよくないと思っていたが  
キーはこちらにあるから解除して中に入るか

ん？開いてるじゃないか

昨日までは開いてなかったのに

助手くん...

ドア、開けてくれてありがとう  
キミの好きな料理だぞ  
ここにおいで、か、ら...

え？

あ、じょ、助手くん？

な、なんで  
きみ、浮いて

首つって

ああ....

い、いまおろしてやるから

あ、ああ

だ、大丈夫だ

嘘だろ

なんで、死ぬんだ

な、縄が硬い  
全然切れない

早くしないと

なんでだ  
身体も若返って、生きやすくなっただろう  
なんで、なんで  
意味がわからない

はやく脳のデータだけでもうつさないと

な、なんでこんな頭ぐちゃぐちゃなんだ  
助手くん

おい、反応してくれよ  
なあ、悪い夢か？これは

悪夢にしてはタチが悪すぎるぞ

だめだ、これじゃあ生き返らせることができない

そ、そうだ  
昔の助手くんの記憶のデータがあったはず

少し古いがそれを使えば...  
記憶が少しかけているだろうが、そんなものまた追加すればいいからな

確かこのパソコンに入っていたはず

え  
ない、ない、なんで  
助手くんにはいじれないようにしていたのに消えている

というか助手くん関連のものが全て消されている  
昨日まで全て無事だったのに

こっちも、これも？  
う、嘘だろ

くそ、助手くんの手術がうまくいって油断していた...

助手くんがやったのか、これ  
どうしてここまでして...

これじゃ...本当に...死んでしまったのと同じじゃないか

私を生き返らせないように、ここまでして...

そんなに死にたかったのか...？

ま、まだ何か他の方法があるかも知れない  
は、早く...

ん？  
これは助手くんの手紙？

私、宛だ...

ソラさん、へ  
せっかく若返らせてくれたのに死んでしまってごめんなさい  
僕のクローンのデータとかは全部けしました  
こうなってしまった時のために、何年も前から準備していたんです  
だから、僕はもう、絶対に生き返らないと思います  
パスワードとか、勝手にみちゃってすいません  
やはり、自分は寿命で人生を終わらせたいです

ずっと一緒にいたいと言ってくれてありがとう  
でも、永遠を生きる勇氣は自分にはないです  
弱い男でごめんなさい  
だけどソラさんが幸せになれるようにずっと祈っています



あ、ああ...

何を、いつているんだ

キミがいないと、私は、幸せになれないよ...

うわああ...

うえ...

えっ...

あああ....

うああああん....

私をおいていかないでくれ...

1人に...しないで...

助手くん...

いやだ...

死なないでくれ...

寂しいよ...

ずっと1人でも大丈夫だったのにキミがきたせいで1人が辛いものになってしまった

どうしてくれるんだ

地獄にいけ

地獄におちてしまえ

バカ、大馬鹿だ、助手くん

あああ...

違う...

おおばかは、私だ...

助手くん、ごめん

間違った愛し方をしてしまって、ごめん

もう絶対に間違えないから、帰ってきてくれ  
間違っていたら、指摘してくれたらなおすから

何が、だめだったんだ

教えてくれよ  
何もわからないんだ

人をこんなにも、心から愛したことがないから

うう...

家事も、掃除も、何もしないでいいから

私が、キミの分まで全部、やるから

私のそばにいて、たまに笑ってしてくれるのなら、何も、何もいないから

お願いだ...

私をおいていかないでくれよ...助手くん...

ああ、助手くん手が、冷たいよ

寒いのか...？

それじゃあ、私があたためてやろう

どうだ  
私の手はあったかいだろう

よしよし

よく寝ているな  
手術の後だから疲れたんだろう

私も、キミの状態が不安でここずっと眠れていなかったんだ

少しだけ眠いよ

それじゃあ一緒に寝ようか

久しぶりに同じベッドで

ふふふ、あはは...！

~~~~~

(☆エンディング2_ハッピーエンド)

おーい
いつまで寝ているんだ
助手くーん

目を開けろー
キミの恋人が腹を空かせているぞ

このままじゃ餓死してしまうー
はやくー

うーん
起きないな
いっそ眠り姫のようにキスでもして起こしてしまおうか

ん？

なんだ、起きたみたいだな

おはよう
顔が少し赤くなっているが、どうかしたか？

ふふふ

さあ、はやく朝飯の準備をしてくれ
腹が減ったからな

ほら、モタモタするな
きみは私の助手なんだからさっさと起きて私のために働け

もうその身体を動かすのに慣れたか？

そうか
問題がなさそうでよかった

さあ、飯が終わったら掃除に洗濯、書類の整理、やることがたくさん待っているぞ

あと、一番大変なのが、私の相手だな

なんせ十何年ろくにスキンシップ取れていなかったんだ
少し甘えるくらいいいだろう
私たちは恋人じゃないか

それに、私はキミのことずうっと介護してやっていたんだぞ
食事、健康管理、排泄から入浴、私が面倒見てなかったら何もできなかったからな

ああ大変だったよ

毎日遅くまでキミの面倒を見ていたからよく眠れなくてね
元々ひどかった目のクマがさらに悪化してしまった

身体中痛い

ああ、疲れたなあ

ふふ、バツが悪そうな顔をしているね

今度はきみが私の介護をする番だぞ
先ほど言った仕事に、私の全身マッサージも追加だな

はあ、きっとこれを幸せって言うんだろうね

幸せは永遠に続かないというが、私は永遠の幸せを手に入れた

楽園はずっとそばにあったみたいだな

逃がさないからな、助手くん

ん、どこにも行かないって？

どうだか

人間は言うことがコロコロ変わるからな

きみを信用していないわけではないが、もしもの時には備えておかないと

もしもの時って言うのは、キミが私の元から逃げようとした時のことだ

この場合、研究所から逃げる、と言うだけでなく死ぬことも含まれる

死のうとしても簡単には死なせないよ

キミはずうっと私の元で生き続けるんだ
キミの命の長さは私がコントロールできる

私に無理やり、永遠に生き長らえさせられ、私の相手をさせられ続ける

まさにモルモットという名にふさわしい

まあ、死にたくなったら私に嫌われることだな
そんな素振りを見せたらホルマリン漬けにでもしてやるが

意識あるまま保管してやるから一生閉じ込められたまま、後悔するんだ

ふっ
なんてな

幸い、きみも私のことが好きみたいだし
そんなことにはならないだろう

なあ、そうだろ？私のこと好きなんだろう？

ふふ、顔を近づけただけでそんなに顔を赤くして、可愛いやつだ

ほらもっと近づけ

ん...

ふう

助手ちゃんとキスするのも久しぶりだな

どうだ
久しぶりのキスは

よかっただろ
キミの心音が聞こえて、私も少しだけドキッとしたよ

ん？私の耳が赤い？
うるさい

そういうのは指摘しないでいい

余計、赤くなってしまうからな

自分はしてたくせになって？
私はいいんだ
でもキミはダメだ

はあ
こんなので私も赤くなってしまうなんてまだまだだな

慣れてしまうくらいずっと、ずっと一緒にいよう

まあ、何十年も一緒にいてお互いこんな感じだからな
数百年は厳しいかもしれない

でも、それはそれで私たちらしくていいかもな

ふふ

愛しているよ

もう、何があっても、永遠に、絶対に、キミを離さないからな

覚悟してくれよ

助手くん